

「なんでだろう?」「やってみたい!」から広がる遊びを目指して
～自然物や栽培物を通して主体的に人やものとかかわり、小学校に繋がる学びの芽を育てる～

長泉町立長泉幼稚園 教諭 杉 山 真樹子

1. はじめに

近年、保育において子どもの「主体性」の大切さについて考えがより一層広がっている。幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領にも「主体的・対話的で深い学び」が共通して明記されている。私は子どもが心を動かし、子ども自身の思いや選択で遊びを展開していくことが大切だと考えている。また、家庭の中にいた子ども達が初めて社会に出て生活する幼稚園は、学びのスタートの場として重要な意味を持つと考える。

令和4年9月、担任していた年中児が畑に大根の種蒔きに行った翌日、一人の男児が「大根の種はどこにあるの?」と、尋ねてきた。

本研究では子どもの興味関心の芽生えた自然物や栽培物を通し、「なぜだろう?」「やってみたい!」と、感じたことから、「こうかもしれない」と考えたり、友達と共有したり、試してみたりすることを積み重ねるなど、主体的に人やものとかかわりながら生き生きと遊ぶ中で、様々な学びの芽が育つのではないかと考える。

2. 研究仮説

本研究をすすめていくにあたり、次のような仮説を立てた。

「子どもの興味関心からスタートし、意図的な環境構成を行い、主体的に人やものとかかわる体験を積み重ねることで、『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』(特に『自立心』『思考力の芽生え』『協同性』『言葉による伝え合い』)が総合的に育つだろう。」

3. 研究実践

大根の種はどこにある?

①疑問を感じた瞬間を大切にす。

畑に大根の種を蒔きに行った翌日、「大根の種はどこにあるの?」と、年中児だった男児Aが尋ねてきた。最初は園にある図鑑を使い、男児Aと一緒に調べたが記載されておらずわからなかった。そこで、クラス全

体に投げかけ、どこになるか個々の考えを尋ねたり、予想を立てたりした。すると、子どもの中から「植えて調べてみたい!」という意見が出てきたため、大根の種がどこにできるのかを調べる実験が始まった。

②継続して観察できる物的環境を用意する。

園で借りている畑は少し離れた園外にあり、毎日世話をしたり観察したりすることが難しかった。そのため、継続して観察し変化や生長を実際に目にできるよう土嚢袋に土を入れ、園庭の一角に置いて観察することにした。(令和4年 年中9月)

園庭という身近な場所に置くことで、すぐに世話をしたり観察したりすることができ、関心の継続にも繋がった。また、本園は親子登降園のため、登降園時に子どもが大根の様子を知らせたり、一緒に観察したりする姿も多く見られた。親子で興味をもつことで、更に意識の継続や親子の会話にも繋がっていった。

実際に目の前に実物があることは、言語のみでの理解が難しい子も五感を働かせながら触れることができた。

③子ども達なりの予想を試したり、確かめたりできる環境と場を設ける。

大根が生長すると、子ども達から「抜いたら種が(土の中に)あるかもしれない!」「切ったら種が入っているかもしれない!」という意見が出てきた。皆で相談し、複数本植えていた大根のうち一本を収穫してみることにした。収穫した大根の周りを観察してみたが、種は見当たらなかった。そこで、どこに種がありそうか皆で予想を立ててみた。子どものイメージは様々だったが、一人一人の考えを大切に、受容するように心掛けた。様々な意見が出てきたが「切って確かめてみよう!」ということになり、切ってみたがここでも種は見つからなかった。



【資料1 大根の中に種があるのか切ってみて調べて見た様子】
(令和4年 年中12月)

この頃の大きな変化は子ども同士で「なんでないのかな?」「どこなんだろう?」と、話す姿が見られるようになったことだった。近くにいる友達と、疑問を共有したり、新たな予想を一緒に立てたりする姿が多く見られた。

新たな予想を立てる中で「もっと大きくなったら何かが変わるかもしれない!」という、意見が出てきたため、収穫していない大根は引き続き、植えたまま観察を続けることにした。

予想を立ててから、試してみたことで、あると思っていた場所がないことがわかると、次への「なぜだろう?」「〇〇かもしれない」「知りたい」という気持ちが大きくなっていった。

④子どもの心が動いた瞬間をクラスで共有・共感する。

継続して観察すると、とうが立ち、花が咲いた。大根に花が咲くということに驚きを隠せない子どもの姿がとても多かった。「見て!花が咲いている!」「大根って白い花が咲くんだね。」「お花がどんどん増えていくね!」と、嬉しそうに顔を見合わせ、発見や気持ちを共有する姿があった。それまで以上に友達と誘い合い、自主的に世話や観察をする姿が見られた。



【資料2 観察したり世話をしたりする様子】

実際に生長を間近で観察し、身近に感じてきたことで、この驚きや感動は子ども達が感情を大きく動かす出来事だった。(令和5年 年中3月・年長4月)

そして、園庭に咲いていた、オシロイバナの種に関連させ、「花が咲くってことはそこに種ができるのかもしれない!」と、予想を立てる子も現れた。

⑤新たな疑問を深掘りし、友達と共有・協働できる場を用意する。

花が枯れたあとに黄緑色のサヤができ、中が膨らんできた。「この(サヤの)中に種があるかもしれない!」と、皆でサヤを開けたところ、中から粒が出てきた。中から出てきた粒を見て「あれ?」と、子ども同士で顔を見合わせ、「種の色違うよね。」と、年中児の時に蒔いた大根の種の色と違うことに気づいた子ども達だった。触ってみると「なんだか柔らかい。」「もっと(蒔いた大根の種は)硬かったよね?」と、共有していた。触っているうちに種が潰れ水分が出てくると「やっぱり違うよ。」「でも、大きさは同じくらいだよ。」

と、感じたことを伝え合い、一緒に考える姿が見られた。

クラス皆で話し合うと、蒔いた種とは硬さや色は違うが、大きさは似ていると意見が一致し、引き続き、観察してみることにした。



【資料3 サヤから粒を出し調べている様子】
(令和5年 年長4月)

観察を続けると、「茶色くなってきたよ。」「大変!枯れてきちゃった!」「水が足りないのかも。」と、子ども達が困惑しながら相談し、大根をこれ以上枯らすまいと世話をする日が続いた。

男児Bも友達と一緒に一生懸命、水やりをしていた。その際、茶色くなったサヤが気になり、つまんだ。すると、男児Bの意に反しサヤが潰れてしまった。「あ…」と、バツの悪そうな表情をし、友達顔をちらちらと見ていた。しかし、潰れたサヤをじっと見ていた男児Aが「あ!」と、何かに気づいた。「入っている!」と、嬉しそうに茶色く枯れたサヤに入っていた粒を手にし、男児Bや近くにいた子ども達も集まり大盛り上がりだった。

このことをクラス全体で確認した子ども達だったが「種だ!」と、喜ぶ子と、「本当に種なのか?」と、疑問に感じる子が出てきた。

新たな疑問を皆で共有すると、様々な意見が出てきたが、「土に植えて確かめてみてはどうか?」という、意見にまとまった。どうなったら種だと確信がもてるのかを皆で共有し、粒を植えて観察することにした。保育室に鉢を置くことで、登園したあとに様子をのぞき込みながら子ども同士で楽しみにする姿が見られた。実験開始時にどうなったら種であるかを皆で共有してから観察を始めたことで、子ども達の期待感も大きく、土に植えてから4日後、芽が出た日の朝は皆で大喜びだった。



【資料4 粒を植え芽が出るか実験する様子】
(令和5年 年長6月)

⑥これまでの実験経過を可視化する。

種はどこにできるのかという実験は令和4年9月か

ら令和5年6月まで継続した実験となった。写真を使い表にまとめ、子ども達と振り返った。写真を利用することで、時系列を改めて整理することに繋がった。また、循環していることに気づいた子ども達から、「このできた種を蒔いて育てたら、また大根ができるんじゃない?」「やってみようよ!」と、新たな目的が出てきた。種を蒔いた時期を思い出したり、本で調べたりして、種蒔きに適切な時期にも気づき、時期を待って、再び大根を育てることにした。



【資料5 写真を使用し、可視化した表】

⑦採れた種から大根ができるのか? 更なる子ども達の興味関心の高まり。

これまでの経過と個々の様子を踏まえ、更なる喜びや期待感に繋がるように、自分の蒔いた種がわかるように一人一袋ずつ土嚢袋を用意して種を蒔き、世話と観察を行うことにした。

保育者が声掛けをしなくても、自分達ですすんで世話をしたり、観察したりする姿が多く見られた。また、同じ日に種を蒔いたが、それぞれ生長に差が見られた。このことも子ども達にとっては不思議だったようで、「何で大きさが違うのかな?」「水が足りないのかな?」「パワーが足りないのかも!」と、友達と相談しながらかわり、生長の違いに一喜一憂する姿が見られた。更に、欠席している友達の大根にも「枯れたら大変だから!」と、水をやったり、友達にも心を寄せ、気遣ったりする姿が見られるようになっていた。

意欲的に取り組み、興味を深めてきたため収穫の喜びは大きく、大きさや重さ、根の張り具合に驚いたり、形の違いも楽しんだりしながら充実感を感じているようだった。



【資料6 収穫した種を使って、大根を育てた様子】

⑧興味の広がりに沿った活動。

収穫を楽しんだ子ども達だったが、「どんな大根料理が好き?」という、投げかけから、大根を使った料

理や加工品にも興味をもった。地元の特産物を使った料理の中に大根が入っていることを知ったり、たくあんが大根からできていることや好きなふりかけが大根の葉でできていることに気づいたりした。

ここまでにも干し柿やカレー、梅干しや梅ジュース作り等を行ってきた経験があり、「これ(大根を使った料理)も作れるんじゃない?」「どうやって作るのかな?」「作ってみようよ!」「みんなで食べたい!」という声が上がった。どんな材料や工程が必要か調べ、実際に収穫した大根を使って、ながいずみ鍋やたくあん、大根葉のふりかけ作りを行った。

食に対し、興味の薄い子や食域の狭い子も多かったが、自分で育てた大根を使ったり、自ら調理や加工をすることで、興味をもったり、皆で食すことを楽しんだりする姿にも繋がった。(令和6年 年長1月)



【資料7 ながいずみ鍋・たくあん作りの様子】

4. 成果

継続的な大根の観察についての成果と、この経験があったからこそ次に繋がった成果について述べる。

継続的な大根の観察についての成果

①自立心及び思考力の芽生え

子ども達の疑問からスタートし、子どもなりに考えたことを試す中で、発見はもちろん、新たな疑問や意欲がうまれる瞬間や発展させる姿が多々見られた。

「なぜだろう?」「やってみよう!」「こうかな?」「わかった!」「でも、本当にそうかな?」が次から次へと繋がりサイクルしながら、人やものにかかわり、追求する楽しさの中に自立心や思考力の芽生えを強く感じた。

②言葉による伝え合い及び協同性

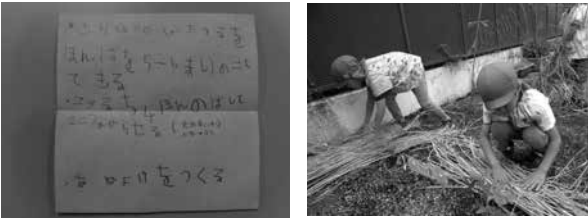
発見や疑問、気づきなどを自らの言葉で発信する力はとても大きくなった。また、友達の発信を受け、共感したり一緒に考えたりする姿が多く見られるようになった。目的を皆で共有できたことや友達の意見や気持ちに共感したり、互いに認め合ったりできたことで、更に伝え合いたい気持ちが大きくなり、言葉による伝え合いや協同性という大きな成果に繋がった。

大根の観察の経験から次に繋がった成果

①夏野菜の栽培（令和5年 年長4月～8月）

大根の実験を経て、子ども達の「なぜだろう？」「やってみてみたい！」は更に大きくなり、調べたり試行錯誤したりする姿は夏野菜の栽培でも繰り返し見られた。特にスイカの栽培では育てる場所の確保や土作り、栽培方法、害虫対策等、次々に生じる課題に自分達で考え、行動し、友達と一緒に解決しようと意欲的に取り組んでいた。

更に深まっていく発見や気づきから納得するまで追求しようとする姿が見られ、最後は大きく育ったスイカを皆で味わえたことで達成感や充実感を感じていた。より一層主体的に人やものと関わり、粘り強く取り組む姿にも繋がったと言える。



【資料8 調べて書いてきたメモ・スイカ畑作り】

②間伐材を使った遊び（令和5年 年長9～11月）

町有林での間伐体験で子ども達が倒した木から、様々な形や大きさの間伐材を提供してもらった。子ども達の「楽しそう！」「やってみてみたい！」「これどうなるかな？」という気持ちは更に大きくなり、個々の遊びからクラス全体でのゲームコーナー作りに発展した。

車作りではタイヤが回る仕組みやまっすぐ進める方法を友達とかかわりながら、様々な道具や身近な材料を使い、試行錯誤が繰り返された。また、振り返りでは、困っていること等をクラス全体で共有する中で、他グループの困りごとを一度受容し、自分事とし考えながら活発に意見交換をする姿が見られ、言葉による伝え合いや協同性が一人一人に確実に育ってきた。



【資料9 試行錯誤しながらのタイヤ作り・役割分担し、繰り返し試す様子】

年度末に行われる園評価アンケートの中で「継続的

な野菜の観察、栽培が植物への関心を高めることに繋がった。」「自分達で育てて食べたことがとても良い体験だった。」という、保護者からの意見があった。保護者が子どもの気持ちに共感したり、子どもの気持ちに寄り添ったりしてくれたことにより、親子でのコミュニケーションや興味関心の継続にも繋がったと言える。

以上のことから、本研究を通し、幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿の、特に「自立心」「思考力の芽生え」「協同性」「言葉による伝え合い」が、子ども達の学びの芽として、大きく膨らんだと考える。そして、この経験が小学校でも「主体的・対話的で深い学び」に繋がるだろう。

5. 課題

- ①大根やスイカ等で得た知識や気づきから、他植物との花や種、生長過程を比較したり、更に追究したり、深い気づきに繋がったりするよう、保育者の意図的な投げかけに努める。このことが、子ども達の興味を更に膨らめ、小学校での学びの架け橋となると考える。
- ②子どものつぶやきをキャッチし、どんな環境が必要か、適度な環境なのかを保育者自身が考え、振り返り、子どもの思いが実現する環境構成を模索する。
- ③子どもの実態を小学校と共有し、スムーズな橋渡しに繋がるよう工夫を行う。

6. おわりに

長泉町では小学校へのスムーズな接続、連携を目指し、幼稚園、保育園、こども園、小学校、中学校の職員が一堂に会した研修や情報交換会、保育参観、授業参観等の取組がなされている。様々な視点で保育参観や授業参観を行い、グループワークや意見交換をする中で、互いの理解を深めている。

幼児期に自ら心を動かし、得た喜びや感動、そこにかかわった人やものとのつながりは子ども達の前向きな気持ちや意欲に繋がり、今後の基盤になるだろう。

小学校という新しい世界に飛び込む子ども達が前向きな気持ちで学びに向かい、意欲的に過ごせるよう、子どもの実態や園での学びを小学校と共有し、小学校へのスムーズな接続を意識していきたい。

今後も、幼稚園で経験したことの積み重ねが一人一人の自信となり、様々なことに主体的に取り組み、「私は〇〇が好き！」「すごいね！」「やってみてみたい！」「おもしろそう！」そんな前向きな言葉がたくさん出てくる子ども達を育てていける保育者でありたい。